

中部圏には、伝統と結びついた「あかり」と関連の深い豊かな文化が数多くあります。また、広範な光関連産業の発展のなかで、最先端の光に関する技術を利用した新しい様々な文化が育まれています。

調査季報「中部圏研究」では、こうした中部圏における「あかり」と関係の深い文化をシリーズで取り上げ、守っていききたい中部圏の文化、伝統文化と新しい文化の融合、新しい文化の動きなどについて、多面的に紹介していききたいと思います。

今号では「野沢温泉の道祖神祭り」を紹介します。

野沢温泉の^{どうそじん}道祖神祭り

伝統ある火祭りを支える 現代版「^{さんやんこう}三夜講」

(財)中部産業・地域活性化センター

客員研究員 坂口香代子

小正月と呼ばれる1月15日、長野県北部に位置し、温泉とスキーで知られる野沢温泉の地で、夜空が赤々と染め上げられる壮大な火祭りが毎年開催される。「野沢温泉の^{どうそじん}道祖神祭り」である。道祖神とは、災厄の侵入を防ぎ、子どもの成長や子宝祈願などの対象としてほぼ全国に広く祀られている民間信仰の神である。この道祖神の祭りとして、小正月に火祭りを行うこともまた全国各地で行われているが、その中でもとりわけ野沢温泉の道祖神祭りは壮大な規模で行われ、1993年には国の重要無形民俗文化財にも指定されている。しかし、実はこの伝統ある祭りも戦後一旦、存亡の危機を迎えた歴史を持つ。そこから復活した背景にあるのは、野沢温泉村で戦後始められた新しい祭りを支えるシステムである。「あかりと文化」シリーズ第2回目は、現代版「^{さんやんこう}三夜講」により継承される伝統ある火祭りに迫りたい。



1. 『野沢温泉の道祖神祭り』とは

「野沢温泉村」と道祖神祭り

野沢温泉村は、一説には聖武天皇の時代から豊かな源泉がこんこんと沸き続けているという「いで湯の里」である。現在、人口は約4200人。北信州と呼ばれる長野県北部にあり、新潟との県境に近い場所に位置している。村の総面積は57.95 km²で、その80%以上を山林と原野が占め、景観の良さなどから上信越高原国立公園に指定されている。気候は典型的な日本海側気候で、全国でも屈指の豪雪地帯であり、上信越高原国立公園一部を含む297haが現在スキー場区域となっている。そして、全国に知られる「野沢菜漬」は、その名が示すとおり、野沢温泉が発祥の地。

現在の野沢温泉村は、江戸末期には、柏尾村、重地原村、北原新田村、野沢村、坪山村、平林村、虫生村、七ヶ巻村、東大滝村からなる地域であったが、1875年（明治8年）には前4村が合併し豊郷村に、後5村が合併し市川村となり、その後何回か分離・編入を繰り返した。そして、1956年（昭和31年）の町村合併促進法、いわゆる昭和の大合併により、野沢温泉村と市川村が合併し、現在の野沢温泉村になったのである。現在、村の温泉街には、ホテル、旅館などの温泉宿泊施設の他に、大湯・松葉の湯・秋葉の湯・中尾の湯・新田の湯・十王堂の湯・横落の湯・熊の手洗湯・上寺湯・麻釜の湯・河原湯・真湯・滝の湯という13の外湯（無料の温泉共同浴場）がある。野沢温泉の道祖神祭

りは、この温泉観光地・野沢温泉村で毎年1月15日に代々行われてきた壮大な火祭りである

民間信仰の神「道祖神」を信仰の対象とした火祭り

道祖神は、「ドウロクジン」や「サエノカミ」などとも呼ばれ、災厄の侵入を防ぐ神とされ、文字通り、石造などに刻んで主に村境や辻などに置かれ祀られてきた民間信仰の神である。また子どもの成長や子宝祈願などの対象として、ほぼ全国に広く祀られており、特に中部地方や関東地方を中心とする地域では、道祖神を信仰の対象とした



上ノ平高原途中に見晴台（野沢温泉街から車で20分）からのぞむ野沢温泉街（豊郷地区）（左）と野沢温泉スキー場全景（右）

火祭りが小正月に盛んに行われてきた。

その内容は各地でさまざまだが、長野県の北信地方では、初子の祝い・厄年の祓い・良縁祈願などの性格をもつとされ、火をめぐる攻防戦を伴う道祖神祭りが伝承されている。

とりわけ野沢温泉の道祖神祭りは壮大な規模で行われることで知られ、その始まりは定かでないが、村内の下根の道祖神碑に「天保十巳亥年」と刻まれていることや河野家に残されている「文久三年道祖神小豆焼帳」などから江戸時代後期、天保のころにはすでに盛大に行われていたと推察されている。(野沢温泉観光協会資料より)

「野沢組惣代」を総元締めに 三夜講の男たちが運営

具体的な祭りの内容は後に紹介するとして、まずその概要を紹介しよう。

江戸時代から盛大で勇壮に行なわれる野沢温泉の道祖神祭りは、厳しい雪国の自然を生き抜く上で重要な互助の精神・郷土愛を育む伝統あるお祭りである。

祭りを取り仕切るのは、村内に豊富に流出する源泉の管理や広大な山林管理を行う住民組織で地縁団体法人「野沢組」である。その惣代(代表)を総元締め、祭りの経験者から選ばれた山棟梁



野沢温泉村の「下根の道祖神碑」(奥)。この石碑の裏には、「天保十巳亥年(1839年)、河野源右衛門常範」と刻まれている。右前はパラリンピック聖火台記念碑。1998年の長野パラリンピック開会式で、野沢温泉の道祖神祭りがモチーフになり、道祖神社殿が聖火台として会場の長野市エムウェーブの庭に設置されたことを記念し、建立されたもの

と社殿棟梁などの役員の指揮のもと、実際の運営を任されるのは「三夜講」と呼ばれる42歳厄年と25歳厄年の村の男たち。三夜講とは、男の厄年を迎える数えで42歳を筆頭に、41歳、40歳の3つの年齢層で組織されたいわば祭り運営チームで、この同じ仲間で3年間道祖神祭りの執行を受け持ち、3年後に次の三夜講に引き継ぐ(このシステムについては後で詳しく紹介)。その中でも、毎年本厄にあたる42歳のものが幹事役を務め、この三夜講に数え年25歳の厄年を迎える青年が加わって、道祖神祭りの中心となるのである。

野沢温泉の道祖神祭りは、前年の秋から材料の切り出しなどの準備を行い、祭り本番の1月15日を含め3日間の日程で行われる(資料1参照)。15日の夜、火打石で点火された火元が道祖神場に

【資料1 野沢温泉の道祖神祭りの日程(毎年)】

1月13日	午後1時～	ご神木引き
1月14日	深夜まで	社殿組み立て
1月15日	昼過ぎ	社殿完成
	19:00	火もともらい
	19:30	灯籠到着
	20:00～	花火、道祖神太鼓
	20:30	火もと到着
	20:30～	野沢組惣代の火付け、初灯籠の火付け、子供の火付け
	20:50～	大人の火付け
	22:00頃	終了



野沢温泉の道祖神祭り当日風景。

運ばれると、社殿に火をつけようとする村の男衆と、それを防ごうとする厄年の男衆の非常に激しい火の攻防戦、が始まるのである。1時間余り繰り広げられた攻防戦の後、社殿に火が入れられると巨大な火柱が立ち上がり、祭りはクライマックスを迎える。そこに前年に長男が誕生した家で作られた華やかな装飾がほどこされた「初燈籠」が順番に立てかけられ、燃やされる。やがては社殿も崩れ落ちていき、祭りは終焉へと向かう。

野沢温泉の道祖神祭りは、祭りの勇壮さとともに、「地区を代表する野沢組惣代が総元締になり、厄年の強固な組織に支えられ、道祖神祭りの地域的性格を良く示し、またわが国における道祖神信仰を知る上で極めて貴重な行事である」ことから、1993年に重要無形民俗文化財に指定されている。

2. 『野沢温泉の道祖神祭り』の特徴

地縁法人団体「野沢組」の存在

では、野沢温泉の道祖神祭りの総元締めを務める「野沢組」とはどんな組織か？少し長くなるが、野沢温泉の道祖神祭りにおいて野沢組が果たしている役割は非常に大きく、その概要と組織形態をわかりやすく紹介したい。

鎌倉時代、荘園公領制の中で、戦乱・盗賊からの自衛のためにその地域の惣て（すべて）の構成員により村落共同体が形成された。これが「惣」と呼ばれた自治組織で、最盛期は応仁の乱時だっ

たといわれる。その後、秀吉の太閤検地で消滅するが、その一部は歳祀や水利面で近代村落に継承された。野沢組は、この流れを組むもので、明治時代に入り豊郷地区の全戸が入り「野沢組」として組織。現在、日本で唯一現存する惣組織である。その誕生の背景には、この地が古くから湯治場で、温泉が村人の共有財産（共有浴場）であったということがあり、きちんとした決まりごとをつくりその共同利益を守っていこうということから自然発生的に生まれたのではないかと考えられている。

そういった背景の中、野沢組ではその誕生からこれまで、代表の惣代を中心として、村の共有財産である山林や水源、温泉を守り、村の生活全般を支える組織として存在している。

1961年（昭和36年）には、村の合併を期に、温泉財産（源泉所有・管理）を守るため「財団法人野沢会」を設立し、源泉の3分の2を所有、貴重な資産の散逸を防ぐ手立ても講じている。温泉供給規定として、温泉受給者は他に譲渡・転貸・抵当権・質権の提供ができない。温泉権を野沢会が持ち、温泉を分配する仕組みが現在も守られているのは、この時の判断によるところが大きい。

2000年には、市町村合併の動きを睨み、認可地縁団体法人^(*)「野沢組」として法人化を図った。これにより、それまで名義は村で実質所有していた共有林などを名実ともに野沢組所有にし、組の役割継続を明確なものにしたのである。



「野沢組」兼「野沢会」事務所。右は（左）とその前にある道祖神神社（右）



「野沢組」事務所前には、道祖神神社が祀られている

現在、野沢組・野沢会が管理している共有財産は、温泉、山林、水利権だけでなく、スキー場にまで及んでいる。2005年に「株式会社野沢温泉」として再出発した野沢温泉スキー場の50%以上の株を持つ一番の大株主なのだ。また、野沢組・野沢会は、温泉の使用料などお金に関係することは(財)野沢会、祭りなどは野沢組という役割分担で活動や運営が行なわれているが、組織のトップをはじめメンバーはほとんど同じである。

独特の決まりごとを持つ

「野沢組」の組織形態

現在、野沢組の組員数は714戸（2009年4月1日現在）。その組織（資料2参照）は、惣代1名（任期1年）と副惣代2名（任期1年）、そして22名の協議員（任期2年）で構成されており、次の7つの委員会がある。

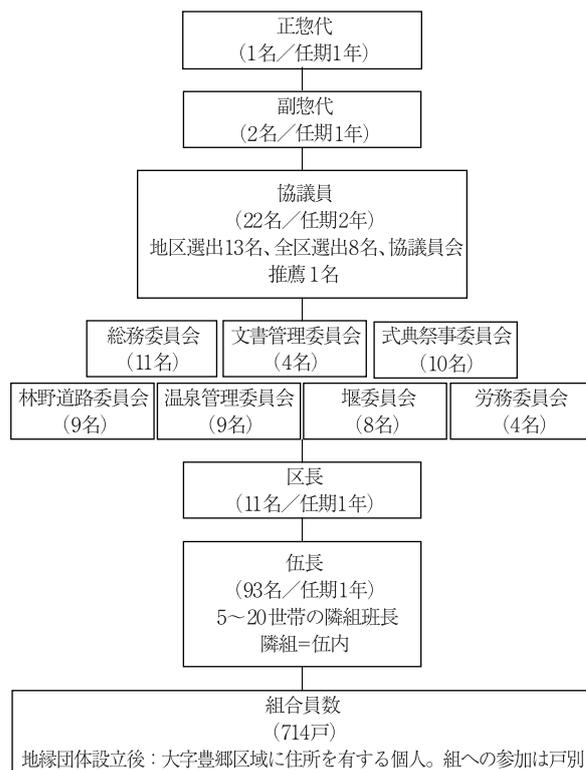
- ①総務委員会：正副惣代経験者で構成され、惣代を助けて運営全般に当たる（11名）
- ②文書管理委員会：惣代の文書蔵に保存されている古文書の管理や研究を行う（4名）
- ③温泉管理委員会：温泉源の管理運営と共同浴場の管理を支援（10名）
- ④式典祭事委員会：社寺に関すること、灯籠祭りや道祖神祭りの運営執行を担当（10名）
- ⑤林野道路委員会：野沢組が所有する林野道路の管理を担当（9名）
- ⑥堰委員会：堰、用水の管理を担当（8名）
- ⑦労務委員会：野沢組各区の区長と連携して共同作業等を行う（4名）

(※)それまで自治会・町内会に法人格は付与されなかったため、所有土地・建物の登記は、代表者個人名義や役員共有名義にすることが多かった。しかしこうした個人名義の登記は、名義人が転居や死亡などにより自治会などの構成員でなくなった場合に、名義の変更や相続などの問題が生じる。こうした問題に対処するために、1991年に地方自治法が改正。自治会・町内会などが一定の手続きの下に法人格を取得することによって、土地、建物等不動産、地上権、賃借権等不動産に関する権利、国債、地方債、社債等を保有することができるように定められたのが「認可地縁団体制度」である。

惣代職は、もともとは江戸期の名主の流れで有力者の持ち回りであったが、戦後、公選制へ移行。正副惣代の任期が1年であるのは、一部の個人に権限が集中しないようにという配慮から。村行政では、惣代は区長会長を兼任しているが、実はこの惣代職は、村の揉め事や、道の拡充の必要性などによる立ち退き問題など、行政の長でも解決しづらい問題も、惣代の鶴の一声で解決するといわれるほどの名誉と尊敬を集める役職である。この惣代を頭に、野沢組は住民と住民、行政と住民の間を取り持つ重要な役割も果たしているのである。

正副惣代は、金・土・日を除き週4日事務所に常駐し、日々の業務に当たっているが、特にユニークなのが、毎日の出来事の記録の仕方である。揉め事も含め、毎日の出来事の記述においてはパソコンは一切不可。すべて“手書き”で記録されている。これは改ざん防止のためだという。揉め事は過去の記録を参照して解決している。

【資料2】



「若者組」から「厄年の三夜講」へ。 新しい運営システムを立ち上げ、 道祖神祭りを再開

野沢温泉では、こうした「野沢組」という独特の自治組織を持ち、道祖神祭りをはじめとする行事も活発に行われてきたわけだが、その野沢温泉でさえ、1953年（昭和28年）に一旦、道祖神祭りを中断せざるを得ない事態に直面する。

実は、それまで道祖神祭りの作業および行事の担当は、現在の「厄年の三夜講」ではなく、「若者組」と呼ばれる8歳～22歳までの5組の若者たちであった（資料3）。年長の世話組（1番組）が全般の指揮を任せられ、各組の大月番（幹事）に指示し作業を行い、村人の協力も得て継承されてきたのである。

しかし、第2次世界大戦で若者が兵隊に行き人手がなくなったうえに、周囲のブナ林も飛行機の用材として伐採され材料不足になり、従来の5段造りの社殿も2段、1段となり、柱を1本立てただけでそれを燃やした年もあった。さらに、戦後は火祭りに対する若者の考えも変わり、とうとう伝統ある若者組そのものが1953年（昭和28年）に解体してしまったのである。

そんな中、立ち上がったのが野沢組惣代であった。1955年（昭和30）、当時の野沢組惣代・畔上政治さんが、伝統ある道祖神祭りが途絶えてしまうことを危惧し、厄年三夜講と25歳厄年の若者で、祭りを継承してほしいと申し入れたのである。結果、承諾され、見事に復活したのが現在の道祖神祭りなのである。つまり、厄年三夜講による祭りの執行という仕組みは、戦後始まった新しい運営

【資料3】1953年（昭和28年）まであった「若者組」の組織

組名	俗称	年齢	道祖神祭りでの役割	
5番組	ヤッコ	8～10歳	ボヤ東、松、豆殻集め	子どもの火付け
4番組	ろっかいせん	11～13歳		
3番組		14～16歳	桁引き	火付け
2番組		17～19歳	桁切り、搬出	社殿の下を守る
1番組 (世話組)		20～22歳	柱の引出し、社殿造り	社殿の上を守る

システムなのである。

3年間の絆が育む 強い仲間意識と上を敬い下を思いやる心

現在の三夜講は、先にも紹介したが、最初の年に男の厄年を迎える数えで42歳を筆頭に41歳、40歳の3つの年齢層（友達衆：野沢では同じ年生まれを「友達衆」と呼ぶ）で編成され、これに数え年25歳の厄年を迎える年齢の青年たちが加わって、3年間にわたって道祖神祭りの中心となる。25歳厄年は毎度変わるが、三夜講については3年間全く同じメンバーで行事を務め、終わると次の三夜講に引き継ぐのである。つまり、初年度に42歳だったものは44歳まで、41歳のものは43歳まで、そして40歳のものは42歳まで三夜講の組織の一員であり、それぞれ42歳の本厄の年に幹事役を務めるのである。

三夜講のメンバーは祭りの準備を含めると、一週間以上も自分の仕事を犠牲にして祭りに携わることになる。これは非常に大変なことだが、これにより、「野沢の男となる」という気持ちが宿命的なものとして受け止められていくという。また25歳の青年たちは、この厄年行事を務めることにより、初めて村の大人の仲間入りができ一人前として認められるとされている。野沢温泉では、祭りは、人間づくり、仲間づくりでもある。

しかし、ここでふと疑問がわく。野沢温泉の道祖神祭りの三夜講は、42歳を過ぎるとメンバーからはずれ、新たな40歳が入るというローテーションではない。3年間同じ仲間でするというところに、互いの絆が深まり、「あいつがやるならオレもやらねば」と忙しい中でも何とか仕事を調整し



完成した社殿の前で記念撮影する三夜講のメンバー。

祭りの準備や執行に励むという、独自の知恵が施されているのだが、一方で、それでは次の三夜講に移った時に、勝手がわからず戸惑うことにならないだろうか。

「そこは大丈夫。次の年引き継ぐ年回りの時は、次の三夜講の一番年齢が上の者が見習いとして参加するのです。一番の年長者は計4回祭りにかかわるわけで大変ですが、彼らはその分、下の者から非常に敬われます。野沢温泉では、道祖神祭りを通じて、上の者が下の面倒をみ、下の者が上を慕い敬うという人間の道理が自然にできていく。これがしぜん、日々の村づくりにも生かされていくのです」(現野沢組惣代・島田さん)

野沢組の存在もそうだが、かつて日本の村(惣)にあった「地域(全体)で生きていく」という仕組みが、道祖神祭りを通じ、この野沢温泉では今も育まれているようだ。

もう一つ、野沢温泉では、古くから同じ年生まれのものは「友達衆」と呼ばれ、子どものころからさまざまな行事を通じて絆を深めている。その友達衆は、道祖神祭りの執行役になる25歳厄年になると、自分たちで独自の名前を考え、会を発足する。例えば1955年(昭和30年)に42歳厄年であった友達衆は「日の出会」、1964年(昭和39年)は「栄進会」、2003年(平成15年)は「虎兎会」といった名前がつけられている。野沢温泉では、「〇〇会」の誰々ということで通じることも多く、友達衆の連帯感是非常に強い。

では、この連帯感や結束を育てている大きな要因になっている野沢温泉の道祖神祭りの具体的な内容を紹介しよう。

3. 『野沢温泉の道祖神祭り』の内容

前年10月に行われる

御神木伐採

道祖神祭り会場にそびえる社殿は、厄年の男衆によって手作業でつくられ、その準備は前の年の秋から始められる。ブナのご神木をはじめ、桁、垂木になる材料、社殿最上層に積むボヤと呼ばれ



伐採したブナの大木は、1本あたり約20人で引き出す。すべて手作業であり、かなりの重労働である。こういった祭りの準備を含め一筋縄ではいかない作業に共に携わることによって三夜講および友達衆は絆を深めていく。



祭り当日は雪で覆われる祭り会場「馬場の原」。手前が祭りを待ち保管されるブナの大木。

る枯枝などの伐り出しは、毎年10月に行われる。伐り出し場所は村の共有林である。

社殿の中央にりんとして立っている御神木はブナの木で、直径40cm、高さ18m以上の大木である。厄年全員で御神木を伐採した後、三夜講と、25歳の厄年がそれぞれ1本ずつ倒された御神木を道祖神委員長の「ツルツル〜」の掛け声にあわせ人力で引き出し、最後の1本は全員で力を合わせて引き出す。

御神木2本は御神木行事のため、日影ゲレンデに保存し、残りの3本と一緒に伐った桁や垂木の材は、社殿組み立て時まで道祖神場の近くに置かれる。桁材は、なら、ブナ、沢胡桃、白樺などの木が使われる。



約2kmの行程を約3時間かけて引いていく。「ツルツルット、ヨイヤサノサー」という氣勢が温泉街にこだまする。



御神木里引き途中、沿道の家から御神酒が奉納されると、声高らかに「〇〇様より御神酒2升」などと披露し、一同でお礼の手締めをして村人やお客様に御神酒を振舞いながら引き歩く。

温泉街を氣勢を上げながら行く 御神木里引き

野沢温泉の道祖神祭りの本番準備は、3日間かけて行われる。

まず、秋に伐り出され、日影ゲレンデに保管されていた御神木2本が、道祖神祭り2日前の1月13日に祭り会場に運ばれる。これが「御神木里引き」である。御神木里引きは、野沢の温泉街を抜け、道祖神会場の馬場の原までおよそ2kmの行程で行われる。途中、神木の滑りが悪くなると、代表が音頭をとり「ツルツルット、ヨイヤサノサー」と氣勢を上げて引っ張り、段差のあるところでは、全員で大木を持ち上げ運ぶこともある。沿道の家からは御神酒を奉納され、その都度大声で披露し道祖神の手締めが行われ、見守る人々に御神酒が



社殿造りは社殿棟梁や保存会の指揮のもと、すべて共同作業で行われる。



社殿に厄年が乗る部分の高さは約7m。御神木の上部はさらに10mほど突き出ている。

振る舞われる。

御神木を立て、 約40畳の広さの社殿を造営

社殿組みの作業は、祭り前日の1月14日早朝から始められる。その作業は全てが手作業である。社殿の中心となる18mの御神木を立てるのも厄年全員によって「胴突き歌」と呼ばれる歌声に合わせて行われる。御神木が立ち上がるとそこに桁材を組み上げ、長縄で上部に固定していく。この作業は14日の深夜まで続く。

祖神祭り本番となる15日は、作業も急ピッチとなる。社殿にはボヤが敷き詰められ、社殿上部の広さはなんと40畳にもなる。また、火の攻防戦で使われるオンガラ（麻などの殻）のたいまつ2,000

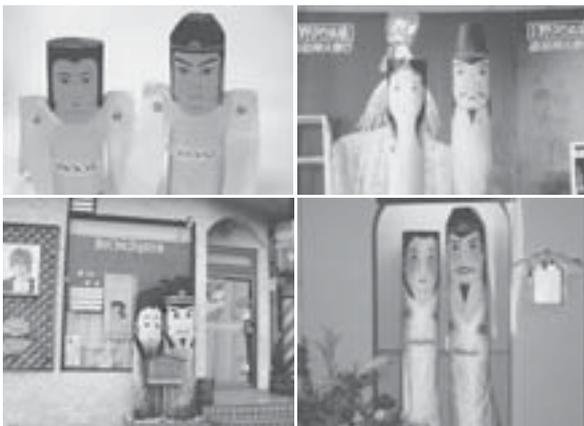
本も社殿上部へと上げられる。

社殿の主は、木造道祖神

社殿の主は「木造道祖神」である。野沢温泉の木造道祖神は、「八衢比古神（やちまたひこのかみ）」（男）と「八衢比賣神（やちまたひめのかみ）」（女）と伝えられている。容姿が非常に見苦しいため婿にも嫁にも行けずにいたこの2神が結ばれたところ、めでたく男子が出生したといわれ、縁結びと子宝の神である。

1月13日になると、祭り会場の他、世話人たちの寄り場前や温泉場の辻にそれぞれ雪の祭壇が設けられ、1.5mほどの大型の道祖神像が立てられる。

この男女1対の神様は、村の各家庭などで、それぞれ素朴な味わいのある手作りで作られ、神



野沢温泉の町中を歩くと、一年を通してあちこちにさまざまな顔をした木造道祖神像が置かれており、その顔を眺めて歩いたり、つくられている木の種類を観察したりするのも楽しい。



縁結びを取り持つため、道祖神場に置かれたたらい。

棚に1年間祀られている。1月14日の夜から15日の昼には「道祖神の年取り」と言って、灯明と神酒を供え、ご馳走を供える。そして、15日の夕刻に「お前の家を見せるぞ」と言って、道祖神場へ持っていき、社殿に参拝するのである。

面白いのは、道祖神場には、大きなたらいが置かれており、前年のものはそこに納めるのだが、そこに置かれている中で気に入ったものがあると持ち帰るのだ。これは、よい縁が結ばれるという意味からで、持ち帰った木造道祖神は再び翌年まで神棚に祀られるのである。

火元河野家で行われる 火元もらい

「道祖神の火を火元にもらいにきました」。1月15日の夕刻になると、厄年世話人たちは寺湯地区の河野家を訪れる。道祖神祭りの元火はこの河野家で採火されるのである。



大正元年から火元もらいの元火は寺湯の河野家が担当。厄年世話人たちは酒を酌み交わし、道祖神歌を歌いながら元火の採火を待つ。



祭り会場へ運ばれる大たいまつ。

かつて、野沢温泉の道祖神祭りは、横落のさかきや旅館の前庭と、寺湯の河原の2カ所で行われており、前者は「上（かみ）のドウロク神」、後者は「下（しも）のドウロク神」と呼ばれていた。これが、大正元年に、警察から火災予防のため人家から百間以上離れて行うことという達しがあり、上下の組が一緒に行くことになったのだ。そして、場所は上組の片桐家所有地の馬場の原に、元火は寺湯の河野家から出すことに全村一致のもと円満に決まったという。これにも、野沢組の存在が大きく働いていることは想像に難くない。

厄年世話人たちは、笠や蓑、そしてわらで編んだオタテグツという姿で祭りの元火をもらいにくる。火元河野家では、厄年世話人になっぶりのお神酒を振舞う。その量は、世話人一人当たりにつき、一升とも一升五合ともいわれ、世話人は元火の採火の間、ほろ酔い気分で「サアてば友だちゃ良いもんだ」と道祖神の歌を歌う。

一方、火元の河野家の主人は、白丁に烏帽子の装束に着替え、床の間に据えられた道祖神像を拝む。その前で火打石で火を起し、種火を弓張り提灯に移し、ジロ（囲炉裏）でオンガラの大たいまつに点火する。この大たいまつを、道祖神の歌とともに、厄年世話人が雪道を走り、祭り会場まで運ぶのである。

「厄年の男衆」対「村の男衆」の火の攻防戦

寺湯地区の河野家を出発した火元が会場に到着



社殿上部に社殿に登れるのは、野沢温泉に生まれた男子でも一生のうち一度、42歳の本厄を迎えたときだけ。25歳厄年は社殿下で松の枝一本のみで村人のたいまつに立ち向かう。

すると、会場の火元となるボヤに点火され、ここからいよいよ祭り本番。火の攻防戦が始まる。

会場の社殿上部には42歳厄年が会場を見下ろすように配置し、社殿下部には社殿を村の男衆から守る25歳厄年が陣取る。

まずは道祖神祭りの総元締めとなる野沢組惣代が火付けを行い、続いて初灯笼の火付け、子どもの火付けへと進められる。ここまでは攻防戦というよりは儀式的な色合いが強く、比較的静かに進行する。

しかし村の将来を担う子どもたちの火付けが終わると一転、祭り会場は大きな熱気に包まれていく。社殿上部から42歳厄年の男たちが大量のたいまつを落とし、それを手にした村の男衆が社殿を燃やそうと攻め始めるのだ。会場で振舞われるお神酒と真っ赤に燃える炎によって、攻める側、守る側ともに興奮状態になり、双方が入り乱れ、非常に激しい攻防戦が続く。これが、野沢温泉道祖神祭りが国の重要無形民俗文化財に指定されながらも、奇祭とも言われるゆえんである。

この攻防は1時間半ほどかけて続けられ、オンガラのたいまつがなくなるころ手締めとなる。

取材前、社殿が赤々と燃え上がる写真を見た時

は、上部にいる厄年の男たちは大丈夫なのかという思いが心をよぎったが、古くから続いてきた祭りである。火付けは社殿上から投げ下ろされたオンガラのたいまつだけを用い、社殿正面からだけ許されるなどの掟があり、村の男たちはそれをきちんと守る。とはいえ、これだけの火の攻防戦である。怪我人が出ることはある。しかし大きな事故につながったことは一度もない。

攻防戦が終わり社殿の上から厄年の男たちが降りてきた後、火が中心に入れられ、間もなく炎の柱がメラメラと立ちのぼり、夜空を真っ赤に染め上げていくのである。



攻める側である村の男衆は、オンガラのたいまつに火をつけ社殿を攻める。



燃え上がる道祖神社殿。

もう一つの主役 「初灯籠」

そして、火勢の強くなったころ、もう一つの主役、「初灯籠」が奉納の時を迎える。

初灯籠とは、子どもの健康を願い、道祖神祭りに奉納される華やかな灯籠のことで、300点を超える細かな部品からできている。

野沢温泉では、男児の初子が生まれると、道祖神祭りに初灯籠を奉納するのである。灯籠づくりは、灯籠棟梁の指揮に従って親戚や近所の方々、



子どもの健やかな成長を願う初灯籠は、道祖神祭りのもう一つの主役である。

【資料4】道祖神のうた

目出度く建てた 命あるなら来年も
また来年も 命あるなら来年も

唄えばつける サアてば友達良いもんだ
おいとまとれば 笠の露やら涙やら
世がよい 穂に穂が咲いた 升はいらない箕で計れ
夜明けにひとつ 咲いてくれろや梅の花
どんど鳴るとこどこだ あれはお伊勢の大神楽
大神楽にほれて 行かじゃなるまいお伊勢まで
添わせておくれ 縁を結ぶの神ならば
良い娘に良い衣装着せて 袖の下から乳よ握る
乳よ握らせて 乳は内緒の締め樽だ
締め樽締めて 嫁にやります来年は
若い衆頼む 露は寝笹の葉を頼む
お月のように 殿さ心はまんまると

さらに家族の同級生たち（友達衆）が集まってつくられる。

灯籠の高さは約9メートル（5間）もあり、中心柱は下段がミズナラ、上段が杉を使い、最上部にオンベ（御幣）、その下に傘、この傘の周囲に赤色の垂れ幕を縫い付け家紋を付ける。傘の下には風鈴をつけた丸提灯、白扇、瓔珞（ようらく）を吊るす。瓔珞とは綿入れの飾りで、これは地域

のお年寄りのボランティアの手でつくられる。次に絵を描いた菱灯籠が付けられ、その下に約2.5mの長さの竹ひごを36本柳の枝のように垂らし、中央に金色の紙細工で飾った万灯籠を付ける。そしてさらに、一番下に竹の輪を二重に吊し、親戚や友人たちから寄せられたたくさん書き初めを下げるのである。灯籠づくりは秋のうちに終われ、1月11日に「灯籠丸め」と称して家の前に灯籠を組

コラム【野沢温泉とは】

野沢温泉の湯の発見には諸説ある。聖武天皇のころ（724～748年）にこの地を訪れた僧「行基」が見つけたという説、修行中の山伏が見つけたという説、そして手負いの熊が猟師に教えたという説などである。いずれにしても、かなり古くから野沢の地に湯が湧いていることは知られていたようだが、歴史に登場するのは鎌倉時代中期のこと。「湯山村」として現れてからである。

その後、戦国時代には、武田信玄と上杉謙信が十数回の戦いを信州で交えたが、両軍とも、三方を高い尾根筋に囲まれたまさに自然の要塞である野沢温泉で、隠れるように軍馬を休めたと言われている。

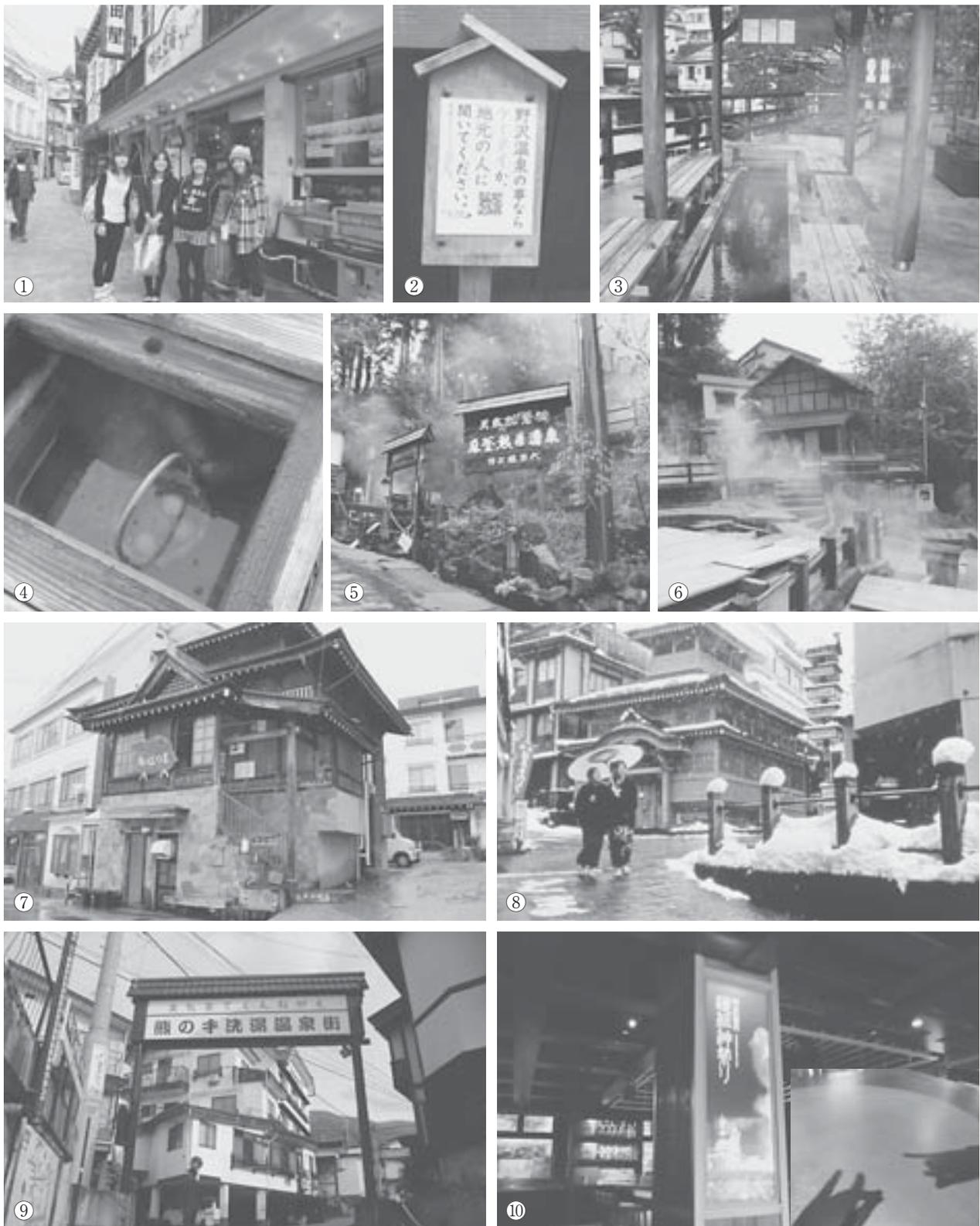
人々が湯治というかたちでこの山里を訪れ、湯治場として栄えるようになったのは、江戸時代に入ってからのこと。飯山藩主の松平氏が惣湯（大湯）に別荘を建て、一般の人々にも湯治を許可したのがその始まりである。北信濃や越後の農家の人々が農閑期の「ごくろう休み」に訪れ、一年の疲れを流して行った。

そんな「桃源郷」のような存在であった野沢温泉も、明治に入り文明開化と富国強兵の近代化の波の中、全国から広く観光客を集める温泉地へと変貌を遂げる。1902年（明治35年）には、この地で初めての経済団体「野沢温泉旅舎組合」（27軒、現在の旅館組合の前身）が結成され、1920年（大正9年）に全国鉄道網計画の中で飯山線が開通すると全国から湯治客が訪れるようになった。

もう一つ、野沢温泉の歩みを語る上で欠かせないのがスキーの存在である。日本にスキーが導入されたのは1911年（明治44年）。陸軍の要請でオーストリアのレルヒ少佐が伝えたものだが、その翌年、民間にも紹介され、野沢温泉にも伝わった。1924年（大正13年）には、野沢温泉スキー場が開設され、その後、野沢温泉の観光地化は、スキーブームと連動して発展していく。もともと典型的な日本海側気候で1年の約半分が雪に埋もれる全国でも屈指の豪雪地帯。古から豊かに沸く温泉があり、春から秋にかけては湯治場や避暑地として賑わいを見せてはいたものの、現在のような道路網の発達する以前の冬の野沢温泉は、近在の湯治客が訪れるくらいのものであった。それが一転、村にスキーが伝わり、それをいち早く村おこしにつなげたことで、野沢温泉は冬にも多くの人々が訪れる観光地として発展を遂げていったのである。

また、野沢温泉には、古くから「湯仲間」と呼ばれる村人によって守られている13の無料の外湯（共同浴場）があり、温泉場としての形態が他の温泉地と大きく違うのも大きな特色である。野沢の温泉は地域の共有財産であり、村に住んでいれば誰でも利用する権利が生まれるというシステムを、野沢組という組織を継続させて管理執行しているからこそ成り立っている特色である。この外湯は村民だけでなく、観光客もルールを守った上でなら無料で使うことができ、地元民とふれあひながら温泉を楽しめるという、野沢温泉の大きな魅力になっている。

（野沢温泉観光協会、野沢温泉旅館組合、野沢温泉スキー場 資料より）



①外湯めぐりを楽しんでいた若い女性客 ②街中の至るところで見かけたこの看板。おもわず地元の人に何か尋ねたくなる？ ③足湯を楽しめる場所もあちこちに ④お店で卵を購入し、自分で温泉卵づくりも楽しめる ⑤野沢組が管理する源泉の一つ「麻釜（おがま）。地元民以外は立ち入り禁止だが、源泉からもうもうと立ち上がる湯けむりを眺めるだけでも心地よい ⑥この「麻釜（おがま）」の温度は約90度。地元民は野沢菜をはじめ、野菜や山野草をこの高温を利用して茹でている。⑦13ある外湯の一つ「松葉の湯」 ⑧浴衣姿で外湯めぐりも楽しめる。奥の建物は温泉街の中心にあり野沢温泉のシンボルとも言える外湯「大湯」 ⑨野沢温泉にはいくつかの温泉街があり、いろいろ巡るのも楽しい。⑩道祖神祭りをイメージしたバー。テーブルの上は炎をイメージした赤い照明になっており、影絵で遊ぶ家族連れもいた。

み立て完成の祝宴を開催。火祭り当日まで毎日家の前に立てられる。

そして、1月15日の夕方、再び親戚や友人がその家に集まり灯籠送りの宴を開き、たいまつを先頭に会場へと運ばれる。火祭りの攻防戦の末、社殿が最高潮に燃え上がるのを待って、1本ずつ火柱の炎の中に倒されていくのである。

こうして道祖神祭りは終焉を迎える。

4. 『野沢温泉の道祖神祭り』の課題とこれから

インタビュー



地縁団体野沢組・財団法人野沢会
惣代 島田悦夫さん

祭りを継承することは 村の財産を守ること

—まず、野沢組として道祖神祭りを継承していく意義をどのようにお考えでしょうか。

島田 ひと言で言うなら、受け継いできた「村の財産を守る」ということです。それが私は野沢組の使命なのだと思います。野沢組は、明治時代に正式に発足してからこれまで、代表の惣代を中心として村の共有財産としての温泉を守り、林野を守り、水源を守ってきました。近代化の波が押し寄せ、人々の生活様式が変わり、時代とともにさ



祭り当日、道祖神社殿の前に揃い、野沢組惣代の話を聞く三夜講と25歳厄年の面々。それぞれの年の友達衆ごとに揃いの服装に身を固めている。

さまざまな変遷がありました。野沢温泉が今も変わらず豊かな地域資源や文化財産を持ちえているのは、野沢組の先人たちの活躍があったからこそ。道祖神祭りも、その貴重な財産の一つなのです。

―道祖神祭りは人づくりでもあるという思いを強く持ちましたが、お祭りそのものが財産であると同時に、それを担う人も大きな財産ということでしょうか？

島田 その通りです。野沢組を支えているのも、道祖神祭りを通して培った連帯感を背景にもった「人財」です。野沢組の役員や委員は、すべて三夜講を経験したメンバーですから、道祖神祭りを通して家族同様の深い絆で結ばれた友達衆や三夜講の仲間として、連帯感や安心感を持ってさまざまな業務に携われるのです。また三夜講をまだ経験していない年代も、いずれ来る三夜講を意識して育ちますから、野沢の人付き合いの良さ、連帯感、三夜講という一つのシステムがあることで大きく育っていると思います。

三夜講の存続へ 動く、野沢組と行政

―戦後間もなく、野沢温泉の道祖神祭りも中断を余儀なくされ、存亡の危機を迎えましたが、新たな三夜講というシステムを生み出し見事に復活。しかしまた今、少子化の波や若者の流出による山村の人手不足は進んでおり、野沢温泉においても例外ではないと思います。道祖神祭りを継承するために、何か取り組んでおられることはありますか？

島田 おっしゃる通り、何と言っても一番の課題は人手不足です。現在、三夜講は年により多少の変動はありますが、今年の例で言うと84人おり、これに25歳厄年を加えると115人。例えば、御神木を1本引くのに20人程度は必要ですから、5本で100人は必要です。ですから今でもギリギリのところをやっていることは事実です。これに対し、さまざまな努力を重ねています。かつては豊郷

地区だけで道祖神祭りを行っていましたが、現在は市川地区と合同開催しています。さらに、村を出て働いているものも多く、会社に1日や2日という単位ではない休みをもらわないといけないわけです。野沢温泉村の男として、三夜講の一員としての役目を果たしたい、道祖神祭りに参加したいという気持ちを強く持つてはいても、個人としてこれを会社にお願ひするのは大きな負担です。そこで、野沢組と厄年の人と合同で、それぞれの会社に依頼の手紙を出し、村の観光への取り組みや道祖神祭りの意義などを伝え、お願ひをしています。しかし、いずれにしても今また、一つの大きな正念場を迎えているとは思っています。もちろん継承していくことを前提として、システムを再び考え直すことも必要になるかもしれません。

―祭りのための道祖神社殿造りなど、専門的な技術の継承も大きなポイントですね？

島田 今から26年前、私がちょうど三夜講のメンバーであった時に、保存会ができました。その2年前にそれまで社殿造りを指揮してこられた棟梁が亡くなり、技術の継承を保存会によって行っていくということになったのです。この保存会の会長は野沢組惣代で、メンバーは前の三夜講の正副委員長経験者たちです。現在55人ほどいますが、一つの三夜講が終わると、その正副委員長が必ず入る仕組みになっています。この保存会の指揮によって、毎年、社殿造りが行われています。そして今、保存会で特に取り組んでいるのが、少しずつ崩れてきている形式をできるだけ元に戻すこと。昔からの伝統の技術をそのまま伝えていくためにどうすべきかに取り組んでいます。

野沢組と行政が協力して 三夜講に参加できる取り組みを

―道祖神祭りを村の観光資源として生かす道への取り組みはどうでしょうか？

島田 これも観光協会とともに、近年、さまざまな取り組みを始めています。2002年には、「野沢

温泉道祖神フェスティバル」を開催しました。「道祖神と火祭りの心」をテーマにしたシンポジウムを行ったほか、実物の半分のミニ社殿の組み立てや火元採火の実演を行い、実際に社殿に火をつけてその炎上までの一連を演出し見学してもらうことも行いました。

また、木製道祖神づくり体験や道祖神餅焼き体験も行っています。餅焼き体験とは、道祖神祭りの社殿は翌朝まで燃えており、村の人々はいつも餅と網としょうゆを持ってやってきて餅を焼き食べるのです。ここで焼いた餅を食べると1年間は風を引かないといわれており、その体験をしてもらおうというものです。

さらに昨年は、観光協会が中心になって、道祖神火祭りツアーをスタートさせています。

しかし、何より重要なのは、道祖神祭りをはじめ、今ある野沢温泉の貴重な資源をこれからも常に魅力ある資源として使えるように守り育てていくことだと考えています。